

164
9
586

青年叢書第壹

人世觀

仙臺正教青年會

020813-000-5

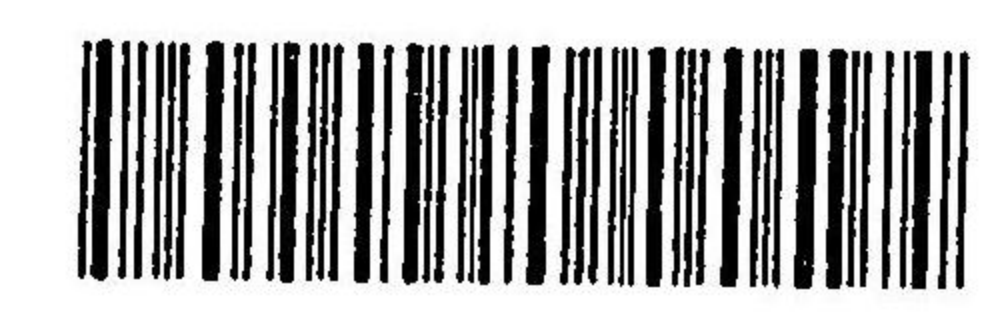
特16-431

人世觀

半井 分次郎 (巴志里, ワシリイ) / 著

M27

ABI-0639





緒言



人生は最も崇高なる問題にして又最も知らざるべからざる大問題あり、此問題にして燎然明白あらざれば確乎たる人生の貴を知らざるが故に其理想や倭少に敢て永遠の深きに透徹するものとなく其行爲や軟弱に僅に現在の得失に拘泥するを以て耿耿たる人生の價値はこゝに墮落して一世の光輝は闇黒の中に埋没せんを嗚呼これ實に最も慨すべきことにあらずして何ぞや哲士之を以て爽利ある知識を振つてみれば秘密を解んを欲し詩人之を以て玲瓏ある麗心を放つて人生の性情を傾瀉し以て人生の何あるを説き以て性情の何たるを明にせんとするも其理想や即ち眞偽混合したる人間の智識にして其情懷や即ち醜美抱和したる吾人の心あるに於てや如何ぞ深遠曠大なる宇宙の玄理を極めて人生の秘密を發揮するを得んや哲士之が爲に其智識を失ひ詩人之が爲に其心情を破る嗚呼宇宙を説き人生を明すは夫れ遂に能はざるの問題あるか然とも人の生は自ら之を欲せしむ非ずして是を成したる必然の神理あるに由りてあり人已に生るゝや生を愛して死を嫌ふ神理實に此間に一定の經綸あるにあらずんば何爲ぞ夫れこゝに至るや神理既に一定の經綸あらんか玄と雖ども深と雖ども是實に我思想内のものなり即ち彼の心は我に映じて神聖ある默示は此間に來り我をして自然に天地の大問題に通せしむべきあり此般の玄理を觀みずして徒らに曠如る大問題を解んとす誤らざるを得ざるあり我儻聊ふゝに視るあり敢て管見を叙して大方の識正を待たんとするは豈他あらんや

人世觀

(一)

坤輿國を立つるもの少しとせず無数の英雄其間に起伏して幾多の聖賢其間に善化を施し英名を竹帛に垂れて徳望を千載に響きしもの亦實に懃懃とせり然とも今や彼等は皆北邙山下一片の茶毘と化し去りて徒らに空漠たる人生の悲觀を遺すに過ぎずと雖もこれ果して人生の免るべからざることあるか若し夫れ人生にして暗黒ある墓門に没すると共に唯一つの希望をこゝに放棄して寂然ある長夜の眠宮に臥せざるを得ざるに至りては例令其具識は亭々として天を突かんとするの普羅頓と雖も其豪氣は勃々として宇宙を凌がんとせし歴山王と雖も其博愛は滋々として普天の衆生を濟度せんとして鎖克刺と雖も寒冷ある墓は實に澎湃鬱勃たる万斛の希望を吞却して雲煙渺茫の間に附せざるを得ざるにより人生は實に蜉蝣の天地に寓するよりも尙ほ悽絶慘絶に万代の暗涙を擗る只一の悲觀は實に人生にあらずんばあらざるあり

之を以て人生の悲觀を達觀しふる一群の思想家は哀絶ある人生を悲觀するに堪へざるに於て此悲を去りて煩悶せる胸中の情苦を遣らんと欲し人生の悲觀を悲觀とせずして却つて此人生を空とし無とするのみならず更に一切の万有を絶無としてこゝ我心の迷にして自惑あり我已にあるにあらず万有已にあるあらず死と雖も滅と雖もこれ實に恰も泡沫の出滅するが如く本來生あるに非ざるが故に従つて亦死あるに非ず即ち空あり即ち無あるを以て苟も人間にして此間の消息を得んには其心泰然として万有の外に超絶し心胸洒

然として光風霽月の如く淡如瀟灑塵垢を脱出して苦樂に頓着せず恍惚として飄々たる神仙の域に遊ぶにより顯榮利達と雖も之を執する能はず轉軻落魄と雖も之に迫る能はず老死苦と雖も之を窘る能はず逸々として天外の高き以て逍遙して塵俗の卑念を脱するものは即ち老莊の流亞たらんばあらず

此流派ある一見すれば清談を恣にして風月に吟嘯するにより胸懷清涼にして一點の汚塵を留めず落々として人生の煩悶を洗脱したるが如く見ると雖もこれ實に人生唯一の寶物たる希望を殺さしのみならず造化の一大精彩を映せし天地の美妙を埋没して滅亡的に喜びを得んとするあり嗚呼之果して人生の願ふべきことあるか

然とも消極的自殺的に凡百の希望を淡々として虚無に流附する高踏隱逸派の思想家は果して人生に對して何等の希望をも有せざるか吾人は此間に於て頗る疑惑を起さざるを得ざるあり多言を待たず彼等の尙ほ生を貪りて此世に存在せんとせざるはこれ何故あるか例令富貴を欲し顯達を希ふに非ざるも尙ほ人生の幾分か其間に愛慕欣羨すべきもの、存在をればこそ彼等は生を此間に存在へんとせざるが如く苟も然らざりて眞に人生の虚無を信じ空絶を觀するものとせんには苦樂固より我等に關せざるが故に之を悟ると同時に敢て斷然一生を乃光に附して本來絶無の自然に歸り以て陰險ある社會の羈絆を脱すべきあれども事のこゝに及ばざるは蓋し社會の福樂は假相に相違おしとするも尙ほ出來得る丈け此樂を遂げんとせざる希望あるによらざんばあらず然らば人は自然に希望を追ひて無限に進まんとする本性を有するあり已に進取の氣象を有する以上は此性質は先天的に得たるも

(二)

の、あるを以て例、吾をして此世界に存在せしめたる神理其物は雲煙渺茫の間にある。吾をして知るべからずと雖も超絶者自ら吾に此生命を與へて無限の希望を附せし以上は人生は時に或は苦樂交々來りて敢て樂天的に歎天喜地の福樂を得ざるも實に吾人の生命は確乎として永遠に繼續するものたらずんばあらず

然らば生命とは果して如何なるものあるかこれ實に最も至難なる問題にして蓋し玄妙の最も玄妙なるものあり敢て思想し敢て感得るが故に吾自ら生命の本体あるを知ると雖も其本質たる本來漠々として之を抑へんとすれば即ち逸し之を留めんとすれば即ち茫乎たり虚々飄々たる中森々たる崇絶の光を放ちて端嚴美妙に之を潜めば纖毛の微に通じ之を放てば上天の高きに揚りて神通自在に万物に接して悲哀を感じ天地に觸れて宇宙の玄機を咀嚼し悠々として閑あるが如く切々として迫るが如く吾自ら此玄妙不可思議なる思想の本体あるを知ると雖も而かも之を捕捉して充分に解釋あること能はざるにより人生の目的を知らんとして究竟の方針を定めんとするに於てや其本体すら尙曖昧朦朧たるを以てこの事なる實に至難中の至難たるのみならず人生をして此世に存在するを得せしめたる神理其物に至りては更に玄の最も玄なるものにして妙の最も妙なるものあるが故に玄妙を解せんとして更に一層の玄妙に進まざるを得ず人生問題の解釋し能はざる夫れ此の如きを以て千百の哲士詩人は皆此問題の曠遠遼絶あるに落膽して茫茫たる無何有の郷土に絶命の詞を歌ふに至るは亦是非もなきことなれども抑も亦首先よりして其路を誤りしにあらずんばあらず

印度の偉人釋迦牟尼佛は實に絶世の豪傑たりしあり王宮の深窓に長せし貴公子たりしにも拘らず此大問題を解釋して人生の根柢を定めんと欲し十年の苦學を懐膾たる雪山の頂に積み幾度びか死生の間に出入し忽然として菩提樹の下に大悟徹底して天上下に隔離したる神理と人生を一九に調和したり曰く宇宙と云ひ山川と云ひ人間と云ふと雖も畢竟するに三界に圓滿する一大神理の顯現したるに過ぎざれば我等が生と云ひ死を云ふも只此湛然玲瓏なる神理の波動の外あらざるにより我等の目的は即ち此醜穢なる俗塵を脱して澄然たる神理に復歸するにありと道破しぬりしが此觀念や頗る厭世的人士の觀迎する所とありしもこれ實に万有虚無論に皮肉を添へし迄にして人生の悲觀を脱せんとして亦更に一層の悲觀に沈みしものと云はざるを得ざるあり

然り而して佛釋の所謂一大神理たこれ實に我等の如き意旨を有して差別心を具ふるにあらずざるを以て其本体や玲瓏透徹あれども無差別的にして生命なきの玲瓏透徹あり已に差別なく亦生命なしとするに於てや我等は現在の苦樂を脱して此神理と同化するに己の生命を殺して無限の希望を放棄せざるを得ざるが故に我等の人生を組織せし本質は虚無説の如く敢て雪煙に消滅するにあざるも其潑々たる特質を失却するを以て起然として苦樂の外に脱出したりせざるも如此きは實に我等が無限の希望を満足せしむると云ふを得ざるあり

以上我等は佛釋の所謂寂滅を以て人生唯一の希望とするを欲するものにあらずされど若し是眞に絶對の眞理にして唯一の理想あらんには望むべきものとあらずるも亦止むを得ざ

ることあるに、我等は此觀念が果して我等の詩歌と哲理とを満足せしむるかを見んに、佛釋の理想たる宇宙は、みれ一大神理の顯現にして、人間は其分体あるにより、本來清淨潔白のものあれども、無明の煩惱に迷はされて、差別界の俗情に惑溺するより、玲瓏ある絶對の真理を忘却して、諸種の邪念を起し、遂に其應報たる焦熱の苦難を嘗むるに至りしあれば、我等は差別界の俗情に沈没すること、常に玲瓏ある神理を觀するときは、卓然として塵俗の外に離脱するを得て、人生は福樂無爲に何爲ぞ落魄浮沈の涙を搾るときあらんやと

若し失れ我等の人生にして、眞に神理より出て、神理に復歸する、遷渡の運動に過ぎずとせんには、玲瓏ある神理を腦中に觀じて、一切の羈絆を脱する、固く惡しきにあらずれども、其神理とは所謂無生命のものあれば、生あり識あるの我等人間が、此神理と体合して、無上の福樂を得んには、潑洩たる吾人の希望を放棄し、無意識にあるにあらずんば、無差別的の神理と同一化することを得ざるにより、之を以て光榮ある最上の福樂とせんとするは、即ち人生を殺すにあらずるか、我等は本來思想ある性來感情を有するが故に、苟も終始睡眠的の万事を放棄するにあらずれば、佛釋の所謂悟道を入悟することを得ざらんには、人生は實に無意にして、明煌々ある神理に合せんとするものあり、豈夫れ難哉

況んや寂滅爲樂を貪る睡眠的の希望は、吾人の希望に非ざるか、眞正の希望とは、此世の苦難を去りて、勃々たる進取の理想を實行せんとするにあるを以て、我等の人世觀は、此世界の苦難を斷念せんとするにあらず、凡ての障害を拂ひ除けて、無限に進歩せんをすするにあるか、れど佛釋は、此防遏を畏れて、滅亡的の之を免れんとす得々たる愉快何所にかある浩然たる

安樂何所にかある、即ち佛釋の理想は、人生を殺すにありと云ふは、夫れ非ざるか、且つ夫れ佛氏の理想たる果して、我等の哲理を満足せしむるか、人生の寂滅に入るを妨ぐるは、即ち無明の煩惱にして、寂滅爲樂の境に入るは、即ち眞如の光明によるありと、佛釋は證明すると雖も、此二者の關係たる抑も如何眞如即煩惱を唱へんと欲せば、即ち眞如の光榮を破り煩惱別眞如を以てせんとせば、即ち善惡二元の存在を默許せんとす知べし、二者の煩る曖昧あるを、嗚呼其理想の富麗あること、万邦殆んど比類なしと雖も、此二者の明白のあらざる以上は、未以て此間に確乎たる人世觀を定むるを得ざるあり

之を要するに、虛無論と云ひ寂滅説と云ひ共に、皆みれ慘憺なる社會の境遇を避身して、遂に自己をも斷滅せんとするに至りし、あれども、苟も限りなき人生にして、眞に永遠に連續するものあらんには、寂滅を歸し、虛無に失せんとするも、共に皆之水泡に屬するを免れざるあり、然り而して、人は果して永生に連續するを欲せざるやと云ふに、虛無家と雖も、寂滅家と雖も、只其悽酷ある社會の光榮を畏れて、遂に生命をも忌避するに至りし、あれば、本來寂滅を欲するにあらずして、永生を欲するあるにより、永生は即ち天與の思想にして、人生をして、此世にあるを得せしめたる神理の然らしめ、所たるや、昭々乎として明あるが故に、虛無と云ひ寂滅と云ふも、共にこれ深遠曠如ある人世問題を、明す好解答あるを得ざるあり

人生問題を、して適實に闡明せんと欲せば、其本源たる神理を明にせざるべからず、嗚呼神理とは、實に如何なるものあるか、奥如たり、茫乎たりと雖も、而かも其反影は、宇宙に顯れ、殊に著しく人間に現したるに於て、や、吾等は宜しく人間の何たるを究めて、而して神理に及ぶべ

きあり吾等には實に意旨あり感情あり知識あるを見れば其本源なる神理にも亦應に吾人の如く然るべきありこれ實に至當の哲理にして結果に實あれば原因に素あるべからず其の道理の然らしむる所にして蓋し理の最も當を得たるものあり神理已に意旨あり感情あるに於てや吾等を造る亦正に至當の經綸あるべきあり苦難と雖とも悲哀と雖とも豈ふれが經綸の綱を脱するものあらんや

神理已に經綸ありて吾人を造り而して之に善惡を識別し理非を辨別する知識を與へたるに於てや理正に其經綸の何たるを吾人に造ぐるべきあり嗚呼經綸何所にかある歎示何所にかある吾人は先づ之を其先天に得たる自家希望の中より探らん

人生の希望をして明白に吐露せしめば鬱勃たる社會の怒濤を凌ぎ安全なる永遠の港に於て無量の快樂を得るにあり蓋し安樂にして一度び艱難の境遇を経過するに非ざれば真正ある愉快を覺へざるが故に最大なる安樂を得んと欲せば最大なる艱難を忍ぶるべからず是實に吾人の願ふ所にして性情の自然に出でしを知る時は吾人焉んぞ深遠曠如なる神理の經綸に對し大に感謝する所なくして可あらんや

此に於てか知る人生は實に今世に限らざるを虛無家迷へり佛氏誤れり即ち人生は無限にして希望は永遠に向つて走るべきあり勝を僅少ある現在に決するにあらざ永遠の大目的を期して今世の艱難を凌ぎ練磨を苦勞の間に積みて好究を其間に重ねるにあり悲哀何物ぞ勞苦何物ぞこれ皆實に吾筋骨を堅め吾精神を鍛ひて永遠の歡躍に備へしむるものあるが故に苟も吾人にして此崇高なる觀念を得る時は愁然たる悲み解けて春風の駿馳たるが

如く堅氷霜烈何かあらん之を破れば則ち和氣洋洋たる春あり即ち万木鬱蒼たる夏あり即ち豊穰滿々ある秋たるあり熱精の溢るゝ所山を動かし英氣の勃々たる金石を透さん吾人にして實に終始此觀念にて進まんには艱難來るべし病苦來るべし暮來るべし然とも我期望は破れざるあり艱難を経るごとに辛苦を凌ぐごとに勇氣爽發して無限の福樂を其間に覺ふるを得ん亦何を苦んぞか妄りに人世を悲觀して敢て自殺的の喜びを得んとせんとあらんや

耶蘇基督は實に此人世を闡明揮發したる天來の大教師なり彼は深玄闊大なる神理の天降したるものにして神理自ら何たるを明して人生の方向を指示したるものあり吾人は知識あり感情あるを以てや、もされば自ら曠如たる神理を究めんとするも之れ實に有限なる人智の思考にして而かも眞偽混合したる智性の判斷あるにより何を以てか迷謬に沈淪するとあくして宇宙の大機密に通ずるを得んや神理自ら吾人を攝理して其經綸の大道を行かしむ其愛や實に春風の蒸々たるが如く無限の思籠は我に灌ぎつゝありと雖とも吾人の近眼にして淺識ある僅に宇宙の皮想にのみ着眼して活破精刻直に深玄なる宇宙の大源を知り猛然として勇注奮進散て其大道に進まざるが故に天來の教師基督は降下せりこれ即ち奥如たる神理の自ら顯理せしものあり無限の愛情を以て宇宙の天主宰者たる神を明しつゝ人生の依つて來りし所と依つて往く所を指示したり彼あるにあらんば宇宙は暗黒あり例令人眼の朦朧として時に神理を認むることなきにあらざるも其認定や正確ならざるあり正確ならざるが故に確信生ぜず確信生ぜざるが故に其人世觀や曖昧に疑惑より疑

きあり吾等には實に意旨あり感情あり知識あるを見れば其本源なる神理にも亦應に吾人の如く然るべきありこれ實に至當の哲理にして結果に實あれば原因に素あかるべからず其の道理の然らしむる所にして蓋し理の最も當を得たるものあり神理已に意旨あり感情あるに於てや吾等を造る亦正に至當の經綸あるべきあり苦難と雖とも悲哀と雖とも豈ふれが經綸の綱を脱するものあらんや

神理已に經綸ありて吾人を造り而して之に善惡を識別し理非を辨別する知識を與へたるに於てや理正に其經綸の何たるを吾人に造ぐるべきあり嗚呼經綸何所にかある默示何所にかある吾人は先づ之を其先天に得たる自家希望の中より探らん

人生の希望をして明白に吐露せしめば鬱勃たる社會の怒濤を凌ぎ安全なる永遠の港に於て無量の快樂を得るにあり蓋し安樂にして一度び艱難の境遇を経過するに非ざれば真正ある愉快を覺へざるが故に最大なる安樂を得んと欲せば最大なる艱難を忍ぶべからず是實に吾人の願ふ所にして性情の自然に出でしを知る時は吾人焉んぞ深遠曠如なる神理の經綸に對し大に感謝する所なくして可あらんや

此に於てか知る人生は實に今世に限らざるを虛無家迷へり佛氏誤れり即ち人生は無限にして希望は永遠に向つて走るべきあり勝を僅少ある現在に決するにあらず永遠の大目的を期して今世の艱難を凌ぎ練磨を苦勞の間に積みて研究を其間に重ねるにあり悲哀何物ぞ勞苦何物ぞこれ皆實に吾筋骨を堅め吾精神を鍛ひて永遠の歡躍に備へしむるものあるが故に苟も吾人にして此崇高なる觀念を得る時は愁然たる悲み解けて春風の驟驟たるが

如く堅氷霜烈何かあらん之を破れば則ち和氣洋洋たる春あり即ち万木鬱蒼たる夏あり即ち豊穰満々なる秋たるあり熱精の溢る、所山を動かし英氣の勃々たる金石を透さん吾人にして實に終始此觀念にて進まんには艱難來るべし病苦來るべし暮來るべし然とも我期望は破れざるあり艱難を経ることに辛勞を凌ぐことに勇氣爽發して無限の福樂を其間に覺ふるを得ん亦何を苦んでか妄りに人世を悲觀して敢て自殺的の喜びを得んとせんとあらんや

耶蘇基督は實に此人世を闡明揮發したる天來の大教師あり彼は深玄濶大なる神理の天降したるものにして神理自ら何たるを明して人生の方向を指示したるものあり吾人は知識あり感情あるを以てや、もされば自ら曠如たる神理を究めんとするも之れ實に有限ある人智の思考にして而かも眞偽混合したる智性の判断あるにより何を以てか迷謬に沈淪するとなくして宇宙の大機密に通するを得んや神理自ら吾人を攝理して其經綸の大道を行かしむ其愛や實に春風の蒸々たるが如く無限の思龍は我に灌ぎつゝありと雖とも吾人の近眼にして淺識ある僅に宇宙の皮想にのみ着眼して活破精刻直に深玄ある宇宙の大源を知り猛然として勇注奮進散て其大道に進まざるが故に天來の教師基督は降下せりこれ即ち奥如たる神理の自ら顯理せしものあり無限の愛情を以て宇宙の天主宰者たる神を明しつゝ、人生の依つて來りし所と依つて往く所を指示したり彼あるにあらずんば宇宙は暗黒あり例令人眼の朦朧として時に神理を認むることなきにあらずんば其認定や正確あらざるあり正確ならざるが故に確信生ぜず確信生ぜざるが故に其人世觀や曖昧に疑惑より疑

惑を彷徨して遂に荒唐無説に陥り寂滅論に沈溺するに至る固より憐むべきに似たれども抑も亦始よりして已が神理を究むるを得るや否やとの問題に注意せざるが故あり吾人は本來疑惑をべきものあり蒼海の一粟にも及ばざる渺たる一身を以て如何して廣大無限ある神理に對して正當なる斷言を下すを得んや況んや又其見解を正當あり適實ありとせる權威に於てをや已に權威なく亦疑惑すべきものあり宜べかり滔々たる天下皆神理を誤解して光明ある人世觀を立つるを得ざるを

迷へざるものは來るべし惑へるものは尋ねべし基督は神理の顯現者として全世界の疑惑を開き靈界の太陽として混沌なる社會の暗黒を照らし曰く宇宙の創造者は智慧圓滿にして仁慈豊富なる神たりしあり神は人間をし其殊遇に感激して讚嘆措く能はざらしめんが爲めに洪大なる宇宙を造り靈長として吾人を其間に置き榮光を讚揚せしめつ純善あること神の如く永遠に進歩せしむるありと彼の聲は理論にあらずして人心の奥底に潛み發せんとして發する能はざりし自然の觀念を明白に闡明したるのみならず超絶者自ら神理の本体を明せしにより吾人は之により始めて始めて人生の依つて來りし大源を知りて依つて行くべき方向を悟りたり人生此に於てか始めて確實の福樂此に於てか始めて無限なるを得たり

基督の天職實に此の如し故に其來らんを先づ人心を開拓して神理を知るに堪ふるの能力を備しめざるべからず之を以て神は創世の時原人其智慧を破りて神の觀念を損ふや直に之に告ぐるに基督の來るべきを以てし次て其信仰を堅持せる以色列の人民を保護

し幾多の預言者を出して之を導きぬり漠々たる上下五千載の間預言者の聲は實に猶太に轟き其民をして驚く迄に敬神愛國のものとならしめたるのみならず其聲延きて万邦に響き地極に應へたり此聲あるが爲に異邦の學士は不完全ながらも有神の觀念を得て幽かに人生の秘密を照らしたり猶太民之によりて基督の聲を聽かんを欲し天下の蒼生之によりて絶對者の何たるを知らんと欲する念慮愈加りて衷情益功ある時基督は有神觀の最も發達したる猶太に降下せり其邑や僻に其父母や賤あり敢て教育の素養あるにあらず亦名流の之を輔け賢豪の之を擁するあるにあらず其傳導や僅に三年の短日子にして其命の終りや實に悲慘を極むと雖も其運や忽ちにして全盛并びあき羅馬をも動かして文學の淵叢たる希臘を振撼し以て地極に至り以て全世間の人間をして赳然として赴く所を知らしむ英傑の見るべき少あからずと雖も文豪の富膽ある乏しからずと雖も誰か亦古代の人心を動かし中世の思想を一變して今代の文化を振蕩し勢力堂々として將に未來を支配せんとする程に人情の至微に通して宇宙の玄機を明せしものあるか彼の聲は理論にあらず然ども滋味津々として盡ざるものあるは豈其理想の天より降りしが故にあらずや其行爲や敢て彩華爛熳たるにあらず然ども其至誠にして眞摯なる直に人生の至情を明露するは豈其天降の顯現者たるが故にあらずや即ち彼の言や人心の奥底を照らして其情懷や人情の精美を極む假令奇蹟の之を證明するあらんやするも尙ほ其神たるを知るに綽々として餘りあり

かくの如く基督は實に神聖なる天降の顯現者にして人生の根源あり基督を知るにあらず

れば則ち人生を知る能はず人生を知る能はざるが故に其人や即ち悲觀に沈まずんば則ち局促たる現在に拘泥して人價は土中に埋没せんとす之により基督は實に衆美の泉にして万善の源あり哲士の迷霧を開きて清麗剛健ある天外の理想を與へ詩人の心を改革して天地の美妙を發揮する錦心繡腸とあし普天の人衆をして敢然として永生の地盤に堅立せしむ嗚呼基督を知るは即ち人生を知る所以あるを以て人心此に於てか確立し世道此に於てか揚る皆これ基督を中心として流出せし賜たらざんばあらず

人世觀終

明治二十七年七月十二日印刷
明治二十七年七月三十日出版

仙臺市東二番町三十番地寄留

著作者
兼發行者

半井分次郎

印刷者

栗野文治

仙臺市定禪寺通橋丁十八番地

2E-10

Vertical text on the left side, possibly a title or reference number.

